HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	礼文島におけるオホーツク文化の土器製作からみた社会集団の境界
Author(s)	劉, ビンウン
Description	この博士論文の全文は利用可能日以降に公開されます。利用可能日以前の閲覧方法は https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/ をご参照ください。
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第17041号
Issue Date	2026-06-30
DOI	https://doi.org/10.14943/doctoral.k17041
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/100094
Type	doctoral thesis
File Information	Liou_BingWun_abstract.pdf, 論文内容の要旨 https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術）　　氏名：　劉　ビンウン

学位論文題名
礼文島におけるオホーツク文化の土器製作からみた社会集団の境界

本論文の観点と方法

オホーツク文化は、5 世紀から 11 世紀にかけて樺太（サハリン）島から北海道島の沿岸地域に広がった、主に海獣狩猟と漁撈活動に生業基盤をおいた先史狩猟採集民文化である。先行研究では、主に土器型式と住居形態、骨角製銛頭の型式分類などに基づいて、編年が提示されるとともに、金属製品や家畜動物飼育などからアムール川下流域から中国東北部やロシア沿海州地域の文化とのつながりが指摘され、外来の渡来文化という理解がなされてきた。一方で、近年の研究では、土器製作技術における先行する時代との技術的な連続性や、出土人骨の古代ＤＮＡ研究などの成果から、この文化を保持した集団自体が必ずしも全て、大陸に起源を持つ訳ではないことも明らかにされている。

本研究は、先行研究で蓄積されてきた土器型式に基づく、オホーツク文化の編年研究を基礎としつつ、さらにこれまで十分に検討されてこなかった土器の胎土分析に注目することで、土器の製作技術を遺跡単位で検討し、集落レベルでの土器製作技術の特徴と集落間での差異を明らかにしようするものである。土器の胎土分析が型式学的手法による分析と組み合わされることで、土器製作技術に反映される集団や個人の技術選択を明らかにすることができることは、北米などの先行研究において、その有効性が確認され、台湾における先行研究でも取り入られる手法である。

本研究では、土器製作における１）原材料の採取と素地の準備、２）成形段階、３）装飾段階、４）焼成段階の各段階における技術的差異を検証し、胎土分析においては、技術岩石学的観点から土器の薄片を観察することで土器素材の収集地の特定を図っている。また土器製作技術に反映される技術選択が社会集団の知識伝達を通じて社会集団のアイデンティ形成に寄与することを確認するために、台湾の原住民族（先住民族）における土器製作の民族誌資料も参照しながら、土器製作技術の属性分析の有効性についても検証している。

本研究の用いられた資料は、自らが調査に参加した礼文島のオホーツク文化期の集落遺跡から出土した土器資料を用いている。これに同じ礼文島の別地点の遺跡から出土した資料を分析し、比較することで、礼文島内の集落間における土器製作技術の時期的変化、技術選択パタンの相違点を明らかにしている。また、この分析結果を基に、礼文島内部の北部と、中西部の集落間における社会集団の境界を復元することを試みている。

本論文の内容

第一章では、Leroi-Gourhan や Lemonnier などによって展開された「動作連鎖」の概念から「技術選択」の過程の考察を通じて、社会集団やエスニシティの境界の復元を目指す近年の研究動向を確認している。また「技術選択」の具体的な過程として、「学習過程」についての研究動向についての検討も行っている。とりわけ「学習過程」については、土器製作者の性別や年齢、学習時間についての先行研究の検討を行っている。また胎土分析の有効性について先行研究を引用しつつ、説明している。

第二章では、伊能嘉矩や鳥居龍藏、鹿野忠雄ら旧日本統治時代に記録された台湾の原住民族の土器製作についての民族誌と、戦後に宋文薫や陳奇祿、石磊など台湾の研究者により記録された民族誌を参照して台湾の原住民族における土器製作技術の検討を行っている。その上で、これらの民族誌資料から、土器製作における技術選択の実際的な状況を抽出し、遺跡から出土する土器資料を検討する上で、民族誌資料が有用な情報源となることを説明している。

第三章では、オホーツク文化の土器研究の研究史を概観し、土器製作技術に関する先行研究を検討している。学史的には、戦前のオホーツク式土器の名称が定着する経緯から、名取武光や伊東信雄、大場利夫や藤本強を経由して、大井晴男から熊木俊朗へとつながる型式学的手法に基づいたオホーツク文化の土器研究の流れを整理している。とりわけ、大井晴男と熊木俊朗による型式学的検討については、それぞれの研究の視点と手法について検討し、それぞれの研究の到達点と課題点を検討している。

第四章では、本研究において検討する「製作工程」、「技術選択」、「学習過程」を明らかにするための分析手法として用いる、記載岩石学分析法と土器の属性分析についての説明を行っている。記載岩石学分析の手順と、具体的な胎土分析を行う工程についての説明を行うほか、具体的な観察方法としてポイント・カウンティング法の説明も行っている。また、分析対象として用いるオホーツク文化の各土器型式の胎土や成形技法、調整技法、装飾技法、器形の特徴を概観している。

第五章では、本研究において分析の対象とする礼文島の地質学的背景と、具体的に分析対象資料を抽出した２ヶ所のオホーツク文化の遺跡である浜中２遺跡と香深井遺跡群についての説明を行っている。またそれぞれの分析対象資料が出土した、浜中２遺跡、香深井１遺跡、香深井５遺跡、香深井６遺跡の特徴と出土資料の特徴についての説明を行っている。

第六章では、浜中２遺跡と香深井１遺跡を中心にオホーツク文化の土器に関する分析結果をまとめている。分析の結果、浜中２遺跡と香深井遺跡群ともに、続縄文文化期とオホーツク文化期では、土器の素材である胎土が異なる結果が示された。また同じオホーツク文化期の土器の胎土についても、浜中２遺跡と香深井遺跡群との間では、類似した土器製作技術が確認される一方で、土器製作技術の違いを明らかにすることができた。また香深井１遺跡出土の土器には、白雲母あるいは金雲母を胎土に含む礼文島外で製作され、入手した土器が存在することも明らかにできた。

第七章では、第六章での分析の結果についての検討を行っている。特に、浜中２遺跡と香深井遺跡群では、いずれの遺跡においても、オホーツク文化の土器製作技術のうちの成形技法は、土器の器形やサイズ、調整技法やモチーフが変化しても、ほぼ変わらない状況にあることを指摘した。また香深井１遺跡では、浜中２遺跡よりも。砂の粒径や量などの胎土の生成法や混和材の状態に応じて、土器の成形法や調整技術を変えて異なる大きさの土器を製作するという、より強い技術選択と製作上の規制を持っていることを指摘した。

第八章では、考察として、浜中２遺跡と香深井遺跡群におけるオホーツク文化の各時期の土器製作の伝統の復元を行い、社会集団についての考察を行っている。土器製作技術と社会集団との関係では、オホーツク文化中期に現れる壺形の刻文式土器が、他のオホーツク文化の土器製作技術と胎土や製作技術において異なること、胎土の採集地が礼文島外であることから、先行研究で設定されたオホーツク文化の土器の各型式について、個別に製作技術の復元を行っている。

第九章の結論では、本研究の成果とまとめとして、基本的にオホーツク文化の土器の製作技術が連続性を持っていることを確認し、その一方で、刻文式土器の段階に島外から持ち込まれる新たな製作技術がオホーツク文化の土器製作技術の画期となっていることを明らかにした。またこの新たな土器製作技術の導入後の運用では、島北部の浜中２遺跡と島東海岸中部の香深井遺跡群と間に違いを確認でき、新たな技術の運用において同じ島内の社会集団間に境界性が確認できると主張した。